

第15節 ふたごたち4歳のお正月

そんなこんなで、2004年あけましておめでとうございます。

ふたごのリョウとタイは4歳2ヶ月になり、「きょうは幼稚園開いてる？」と、毎朝確認しながら冬休みを満喫中。お兄ちゃんのマサミツには宿題がついてきた新年である。

年末には、3人共雑巾を持って、ベランダの窓拭きを手伝ってくれた。拭く窓がなくなっても、「次、どこ拭くのぉ？」とリクエストをつのる。

外に出られない日には30分に限りパソコンで絵合わせゲームをさせたりするのだが、そのたびにマウスの取り合いになり、涙が出るまでケンカをするので、

「あんたら、ケンカばかりしてたら、お正月来いひんえ！」とドスのきいた声で脅すと、それ以降は、どっちかが怒られそうなことをやっている、

「あーあ、そんなことしてたらお正月来いひんのに！」とつつこんでいる。3歳年上のお兄ちゃんにも同じ態度でのぞむので「なんや！えらそうに！」とまたケンカになる始末である。

そんな3人のところにも、お正月はやって来てくれた。めでたい限り。

さて、お正月！お正月！お正月といえど？お宅の家では何？

私の小さい頃は、おせち、はねつき、花札！であった。結婚すると、相手のお正月とも融合し合うので、また新しいお正月ができあがる。

友人の中には、毎年“をけら参り（京都の八坂神社に12月31日の夜に詣出る）”をして“をけら火（この火で新年の雑煮を炊くとされている）”をもらう、とか、家族全員でスキー場カウントダウン！てな人もいて、冬がめっぽう苦手で出不精な私は、夫がこの類の人であればどうしようかと、密かに不安に思っていたが、夜中の初詣も、雪の中でハッピーニューイヤーもないと知って、ホッとしたのを覚えている。

てな訳で、おせち料理は新婚時代も、こどもが生まれても、ふたごが生まれても、作り続けてきた。お煮しめなどは除いて、おおかたのものは1年に1回しか作らないので、本を見ながら作るのだが、今年はこのおせち料理にちょっとした異変を起こした。

料理自体がどうかなったのではない。3段重ねの重箱の他に、こども用キティちゃん重箱を用意したのだ。

実は、この代物「何かの役に立つやろ、お子たちにあげて」と近所のおばあちゃんが下さったものなのだが、“何かの役”というのをおもちゃとして与えたり、お菓子入れにせず、それぞれのマイおせちを入れる重箱として確保しておいた私は、本当に偉いと絶賛する。

だって、最近のこどもたちの食べっぷりったらありゃしない。食後には必ずみかん2個がついてくると信じているし、おうどんはお汁を残せば替え玉ができるルールを毎回実行している。カレーは最初の一口を食べる前に、お代わりがあるかどうかを確認せずにはい

られない……。嗚呼、食費増大計圧迫。

大皿に入れて、各自が小皿に取り分ける方法が、どうやら無意味になってきたのは去年の夏あたりからだっただろうか。ギョーザなどはこちらが、だいたいひとり 個くらい、などと目安をつけるのはまったくもってムダな計算で、アツと言う間に自分の小皿に4～5個乗せており、4歳も過ぎたのに、“ひとつ取って食べて無くなったら次のを取る”ルールは頭に入らない。ポーとしているお兄ちゃんは「あーん、最後の1こ！」ということになる。

ふたごであることが多少なりとも作用しているらしく、ひとりが2個のみかんを手に入れば、もうひとりも必ず2個を要求する。リョウは野菜好きで、タイは肉魚好きなのだが、不足するものを補うために競うことをしないのは、やはりただの兄弟か？

だいたい、数を数えさせれば、確実なのは1から3まで。4は「よん！」とか「よっつ！」と言わずにニタツとして指を4本立てる。5はかなり自信があるらしいが、6は「5とひとつつ！」でそれから先は……。

で、昨年のおせち料理は好きなものばかり勝手につつくので、重箱の中がグチャグチャになり、大奮発して買った錦市場の伊達巻は、ついぞ私の口には入らなかった食べ物の恨みで、おとなとこどもたちの重箱を別にしたのだ。

これは大正解。おせち料理って、甘かったり、酸っぱかったり、黒かったり、紅かったり、かなり好みがかたよるので、勝手に食べさせていては、何をどれだけ食べたかがわからなくなるので、お弁当方式で美しくそれも、ちょっとリッチに入れてやると喜んだこと！

おちょこになますを入れたりするだけでも「うわぁー！！」もんであった。

おとなと一緒に譲り合いながら、きれいに取り分ける練習は、3年程先延ばしにせざるを得ないが、小さな重箱につめたおせち料理で満足してくれるうちはこれもいいだろう、と思っている。

さて、4歳を過ぎたふたごたち。お兄ちゃんにかかるたを教えてもらっているのだが、これが悲惨な状況になっている。

ひらがなを学習する過程というのは教育玩具の発達にも関係するとみえて、私は、家にひらがな積み木があったのを考えると、表の絵を見て裏のひらがなを覚えたのだろうと思われるが、今は本格的公文式で2歳くらいから始める子もいるし、パソコンで覚えてしまう子もいるだろう。

そんな中で、我が家にも私にとっては新兵器が4年前には出現していた。マサミツが2歳半の頃、夫が買ってきた「アンパンマンあいうえお」だ。

単4電池2本で、アンパンマンが字を教えてくれる。はっきり言って電池が元気な時は、アンパンマンも元気すぎてやかましい。

「ぼく、アンパンマン！いっしょにあいうえおしようよ！！」

「もんだいだよ！『あ』を押してね！」

「ピンポーン！すごいすごいよくできたね！次のもんだいだよ！」

「『ゆ』を押してね！」

「ちがうよ！『ゆ』だよ！！」

と、電池の限り叫びたおす。

マサミツは、私のお腹にふたごたちがまだ入っている時に50音クリアした。つまり、3歳までにひらがなは全部読めた。断っておくがこれは自慢ではない。お腹が重たく辛かった私は、とりあえず「アンパンマンあいうえお」を持たせてひとりで遊んでほしかったし、マサミツにも邪魔する人がいなかったのだから、集中して楽しみアンパンマンに誉めてもらおうと素直に嬉しかったようだ。

ふたごのリョウとタイにも、幼稚園入園までに50音を読めれば、と必殺「アンパンマンあいうえお」を与えてみたが、何せ、もう一台買い足すことをしなかったのだから、当然取り合いになり、パタと開ける本のような形になっていたものは真っ二つになり、機械本体だけが存在することになってしまった。

おまけに、アンパンマンの声だけに反応し、「字」自体には全く興味が無く、ただのケンカ勃発要因にしかならなかった。

それが、4歳になるか、ならないかの時点からタイが少し興味を持ちはじめ、95%解読。リョウは年末から火がつき、50%まで追いついたところだ。

只今は、再び機械が取り合いになり、「アンパンマンあいうえお」も存命が危うくなっている。

この状態でお正月のかるたに突入させたので、いさかいが起こるのは当たり前。

読み手はお兄ちゃんなのだが、まだ1年生なので、自分も読み手だけに収まらず、自分も取りたい。それも真剣。

タイはお兄ちゃんとは3キロしか変わらない全体重をかけて、撒き散らした札を蹴散らし、ほぼ正解の札に突進する。

リョウは知っている字なら一生懸命探すのだが、お兄ちゃんとタイにはかなわず、正解として持っている札数があまりに少ないことがわかると、とりあえず自分の側の札とか、他のふたりが取り合っている札を横から叫び声を上げて取るもんだから、おかあさんには言いつけられるわ、くやしいわ、で、涙涙……になり、毎回5分でお開きとなる。

リョウは負けず嫌いなので、終わり際には持っていた札を天高く撒き散らしたり、まだ、畳に撒かれたままの札を全部取ってしまったりするので、さらにお兄ちゃんやタイにやつつけられ、おかあさんのところにポロポロ涙しながら慰めてもらいに来る。

私はリョウの頭をやさしく撫でつつも、札を無茶苦茶にすることをいさめながら、

「はよ、全部読めるようになったらええやん」と軽くけしかけておく。

ふたごでも、字への関心が起こるまでに時差があり、くやしいという思いの伝え方も違う。推測するに、リョウはきっと、くやしさをバネにして急速に字が読めるようになるで

あろう。書くことに関しては、マサミツよりも早くに興味を持ち始めるかも知れない。

本当に、こどもって、ひとりひとりなんだと思う。

我が家のふたごは二卵性なので、“兄弟よりも似ているが、一卵性双生児よりは似ていない”の言葉どおり、独自の道を歩いているように思う。

幼稚園に入って8ヶ月。お友達との関わり方にも個性がうかがえるようだ。これから更なる友達関係の発展、言葉の習得や、学習へ興味もそれぞれなんだろう。

さて、今度はトランプでもやってみるか。数字は1と3しか読めないで、できるかなあ……不安。

花札はもうしばらくお預け。ただの花合わせなのだが、これは夫にも教えなければならぬし……。猪鹿蝶、青短、赤短……。

なんだか休んでいるヒマのない、楽しいお正月である。